

第五章 北陸・岐阜地方の塔

第 32 番 金栄山妙成寺五重塔—日蓮宗—

石川県羽咋市滝谷町

一度も火災に遭うこともなく、建立当時の姿をとどめていることで有名な妙成寺に、立派な五重塔があると知り、心を躍らせて巡礼に出かけました。

羽咋駅から富来行きのバスで 20 分、滝谷で下車し山側へ徒歩で進んでいくと、田んぼの向こうにある松林の中から、相輪と塔の上層が見えてきます。

妙成寺の歴史は二人の僧の出会いから始まった。日像は真言宗の僧満蔵を折伏し、改宗させ名も「日乗」と改めさせた。二人は、羽咋郡柴垣の領主で日乗の叔父にあたる柴垣将監の元に身を寄せ、石動山の末寺だった滝谷寺を、永仁二年（1294）に改宗し「妙成寺」と改号しました。熱心な日蓮宗への帰依者だった初代藩主前田利家の側室で、三代藩主利常の生母である壽福院の菩提寺になっており、特に利常は母のため伽藍の建立に惜しみなく尽力しました。



二王門の正面の小高い所に、杉木立に囲まれてそびえるこの五重塔は、野面石の上に土台を置き、擬宝珠勾欄付き縁をめぐらせて建てられています。初層中央間の唐棧戸には禅宗様の花鳥や柘榴彫刻が施されています。柱は全て円柱で、組物は拳鼻付き和様三手先を用い、軒は全層二軒繁垂木の平行垂木として、一層毎に角垂木を三本ずつ減らすことで、美しいバランスを生み出しています。建立は、元和四年（1618）で、塔の形式はおおむね和様、一辺 4.85m・総高さ 31.18m、栩葺きの細長い塔身に相輪を長くしてバランスを維持した端正な塔であります。

第33番 自生山那谷寺—真言宗別格本山—

石川県小松市那谷町

奇石・遊仙境で有名な那谷寺に、禅宗様の小さな三重塔があると知り、巡礼に訪れました。加賀温泉駅前からバスに30分乗り、那谷寺で下車すると、もうそこが門前です。

那谷寺は、修験者として知られる泰澄が夢に現れた千手観音を像に彫り、岩窟に安置し白山信仰の鎮守神としました。そしてこの地にお堂を建立され、自生山岩屋寺と名づけました。その後、平安時代中期に花山法皇が、岩窟内で光り輝く三十三身の観音を見られ、ここに西国三十三ヶ所観音霊場の全てに匹敵するご利益があるといわれ、その第一番・那智山と第三十三番・谷汲山から一文字ずつ取って、那谷寺と改名されました。南北朝時代には、新田義貞の攻撃を受け、一向一揆が起こると浄土真宗に改宗する僧や信者が続出し衰退しました。窮地を救ったのが加賀藩主・前田利常で、伽藍を次々に再建させました。境内を進むと、やがて左手に奇岩が見えてまいります。大昔に海底火山の噴火によって隆起し、波によって浸食され、神秘的な形状になりました。さらに進むと、岩壁に寄りかかるように舞台造りの拝殿が建ち、その奥の岩窟の中に本殿があります。

三重塔は、加賀藩大工・山上善右衛門の作と伝えられ、寛永十九年・1642年に建立されたものです。小さな塔ですが、徹底した禅宗様で、初層を大きく取って側廻りを裳階として扱っています。一辺2.93m・総高さ11.6mの檜皮葺きの塔で、四方の壁面は唐獅子の二十の行態や牡丹の彫刻が施され、内部には鎌倉時代の作とされる大日如来像が安置されています。松尾芭蕉も「奥の細道」の旅の途中に訪れ、次の句を残しています。 石山の 石より白し 秋の風



第 34 番 桐山明通寺三重塔—真言宗御室派—

福井県小浜市門前

北陸地方に二つしかない国宝建造物の両方とも明通寺にあると知り、勇んで小浜に出かけました。明通寺は、小浜駅から東に 8 km、若狭街道から離れた丘陵の谷間にあります。松永川に架かる赤い小橋を渡り、石段を登り山門をくぐって参道を進むと、国宝の本堂と三重塔があります。

開山は、征夷大將軍・坂上田村麻呂であります。700 年以上も風雪を凌いできた堂塔は、なにか深いものを沈めた渋い灰色です。若狭湾の潮風、山の冷氣、冬の積雪が作り出した古材のえもいわれぬ輝きがあります。風化ではなく、古色蒼然たる凄みさえ感じる色合いであります。

本堂は、単層、入母屋造りで正嘉二年(1258)、頼禅法師の再建とされています。檜皮葺きの屋根が急に流れ落ち、正面は二本の角柱が向拝を支えています。本道のすぐ左手の石段を登った正面に、美しい三重塔が建っています。擬宝珠勾欄付き縁をめぐらして立ち、軒は全層二軒繁垂木の平行垂木で、組物は和様の三手先を用いています。特異な点は、初層に猪の目付き拳鼻が用いられていることです。文永七年(1270)の再建で、一辺 4.18m・総高さ 22.1mの檜皮葺きの鎌倉時代を代表する純和様の塔です。端で軽快に打つ反りの美しさといい、まさに端正にして崇高という感じであります。塔を圧するかのようなまわりの巨木は、むしろ塔の引き立て役に廻っているように感じられます。



第 35 番 大日山日龍峯寺多宝塔—真言宗—

岐阜県武儀郡武儀町下之保

舞台造りの本堂と軒反りの美しい多宝塔が高沢山の山頂近くにあることを知り、早速訪れました。名鉄新関駅からバスで 15 km ほど北上し高沢観音で下車、40 分ほど歩き、参道を登りつめたところに、日龍峯寺があります。高沢山の山頂に安置されている観音なので、高沢観音と呼ばれています。

寺伝によれば、仁徳天皇の時代、異人両面宿難がこの地の豪族として権勢を振るっていました。高沢山山頂の池の神龍が村人に危害を及ぼしていると聞いて、退散させ、寺を開いたといわれています。鎌倉時代に全国が早魃で困ったとき、北条政子の夢の中に神龍が現れて、お告げをしました。そのお告げの通り供養させたところ、霊雨が降って五穀が実ったので、七堂伽藍を寄進したと伝えられています。

多宝塔は、鎌倉時代中期の建立で、基本的には和様、一辺 3.97m・総高さ 14.7m の相輪や軒反りの美しさを見せる塔です。

多宝塔からさらに進むと、清水寺の舞台をおもわせる本堂があり、美濃清水の異名で世に知られています。



第 36 番 吉田山新長谷寺—真言宗智山派—

岐阜県関市長谷寺町

刀鍛冶で有名な関市に、室町時代に造られた流麗このうえない三重塔があると聞き、巡礼に出かけました。長良川鉄道刃物会館前駅から東のほうへ15分ほど歩くと新長谷寺門前大広場に着きます。新長谷寺は、吉田村（きったむら）の観音さま、つまり吉田観音としたわれ、今も多くの参詣者が絶えません。新長谷寺の名は、本尊の十一面観音像が奈良の長谷寺の本尊と同じ木で作られたことから付けられたといわれています。



開創は、護菴上人で後堀河天皇の勅願で、国家鎮護の道場として、貞応元年（1222）に建立されました。その後寺は、何度も火災に遭い、長禄六年（1457）に再建されたのが現在の諸堂です。

三重塔は、二階堂行藤の娘理秀尼が大檀那となって、隆覚上人が建立したが、火災で焼失し寛正四年（1463）に再建されたのが現在の塔です。擬宝珠勾欄を付けた縁をめぐらし、組物は三手先、軒は全層とも二軒繁垂木の平行垂木を用いています。一辺 3.94m・総高さ 20.1mで、おおむね和様で、屋根は檜皮葺き、軒の出が深く端の反りの著しい、華麗な塔であります。

宮大工のざれごと—⑤宮大工と雀は軒でなく

寺院の建物で、まず目が行くのは「軒の線」です。「軒反り」を美しく造るためには垂木の組み合わせが重要になります。真っ直ぐな垂木では、反りは出来ませんので、垂木にも反りをつけねばなりません。木を削って反った形にしてゆくしかありません。さらに全体の垂木が同じ反りになっては具合が悪く、軒の端に向かって反り具合を変化させていく必要があります。さらに軒の端は四つあり、ここの納まりが良くないと、美しく強くなりません。このように、軒は宮大工が一番気を使うところで、しかも苦勞するところです。軒下で鳴いている雀と苦勞で泣く宮大工を引っ掛けた語呂合わせです。

第 37 番 日吉神社三重塔

岐阜県安八郡神戸町神戸

門前町として発達し、江戸時代には九斎市が開かれ近郊の中心地として賑わった神戸町に、三重塔があると聞き、訪れました。近鉄広神戸駅（ひろこうど）を出て北のほうへ 20 分ほど歩くと、ちょっとした森が見えてきて、そのなかに日吉神社はあります。境内に入った東側に、三重塔があり、正面の奥まったところに本殿があります。

この社は、郡司・安八太夫が最澄を招き比叡山から山王権現を勧請して創建したとされます。ここは昔、比叡山の荘園・平野庄があったところで、荘園の管理と天台宗を広めることがはかられました。明治の神仏分離の際に寺は廃止され、神社だけが残って現在に至っています。

現存の塔は、永正年間（1504～21）齋藤利綱が再建し、天正 13 年（1585）稲葉一鉄（春日の局の叔父）修造したものであります。室町時代後期の様式ですが和様の強い折衷様で、中央間は棧唐戸で脇間は板張りになっています。一辺 3.95m・総高さ 23.45m の各層の軒の出は深く、屋根は檜皮葺き・勾配は緩やかで流麗な塔であります。三層になぜか勾欄がないのが、目を引きます。

玉垣中央の石段の左右には百八灯明台はあり、左右あわせて 108 の灯明がつく仕組みになっています。



第 38 番 両界山横蔵寺三重塔—天台宗—

岐阜県揖斐郡谷汲村

「美濃の正倉院」とも呼ばれ、即身成仏を果たした妙心上人のミイラで有名な寺に、和様の美しい塔があると知り、早速巡礼しました。華厳寺のある谷汲門前のバス停から乗車し、西へ九十九折の岩坂峠を越え横蔵盆地からやがて飛鳥川沿いに北上、約 30 分で横蔵寺前に着きます。バスを降りると、目の前の鬱蒼とした山裾に、鮮やかな朱色の医王橋や苔むした石垣が望めます。

寺伝によれば、桓武天皇の勅願により、最澄がこの地の長者三輪次郎太夫を施主として創建し、最澄自らが一本の霊木より二躯の薬師如来像を刻み、一躯は比叡山延暦寺に、もう一躯は当地に本尊として祀ったのが始まりといわれています。戦国時代、織田信長の兵火により衰えたものを、江戸時代の始め幕府の保護を受けて、現在の堂宇は建立されました。

山門をくぐり石段を登ると正面に香堂、その右手に素木造りの三重塔や奥に総ブナ造りの本堂が並び、杉や楓の木立の中に静寂そのもののたたずまいであります。三重塔は、寛文三年（1663）の建立で、一辺 3.65m・総高さ 18.9m の檜皮葺き、和様の伝統を受け継ぐ美しい塔であります。石を高く積み上げた壇上に勾欄のない縁をめぐるして立ち、装飾の多い江戸時代風好みで、中央間は板唐戸、脇間は蓮子窓、組物は三手先で竜頭の彫刻がつき、軒は全層とも二軒繁垂木の平行垂木を用いています。

瑠璃殿に全国的にも珍しい仏像であるクス材の一木造り深沙大将立像という砂漠の護法神が祀っております。



宮大工の知識—V 三重塔の各部名称

